

RACE 2016 AUTOBACS SUPER GT Round2 『FUJI GT 500km RACE』
 DATE 予選：2016年5月3日 決勝：2016年5月4日
 CIRCUIT 富士スピードウェイ（静岡県）
 WEATHER 予選：晴れ/ドライ 決勝：晴れ/ドライ
 RESULT 予選：8位 決勝：リタイア

開幕戦の岡山からほぼ1ヶ月。早くもシリーズ第2戦「FUJI GT 500km RACE」が、ゴールデンウィーク中盤の5月3、4日に静岡県・富士スピードウェイにおいて開催された。期間中は気温の上下が激しかったものの、つねにドライコンディションの恵まれた天候となり、TEAM KUNIMITSUのNo.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTは予選8位からのスタートを迎えた。だが、不運なタイヤトラブルが重なり、レース終盤を前に戦列を離れることになった。



開幕戦のあと、4月中旬にはタイヤメーカー合同テストを行ない、富士への挑む予定だったTEAM KUNIMITSU。しかし、その直前に「平成28年 熊本地震」が発生。実施予定だった九州・オートポリスでのテストはキャンセルとなり、そのまま第2戦富士を迎えることになった。幸い、富士ではシーズン直前の合同テストが行なわれており、チームではその時のデータや開幕戦岡山での実走データなどをもとに、富士への準備を行なった。

大型連休のカレンダーに合わせて開催されることになった第2戦。予選日の朝は薄曇りとなり、あいにく富士山の姿もお預けに。午前9時からスタートした公式練習の時間では、まず持ち込み段階のセットアップの確認からはじめ、調整を繰り返していく。また、今後のコンディション変化も考慮した上で、予選で装着するタイヤを決めるなど、メニューに沿って作業を進めることになった。

◎ 予選：

朝の練習走行では、11番手となったNo.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GT。ノックアウト方式の予選のため、Q2への進出を果たすには、まずQ1で8番手以内に入らなければならない。朝のセッションの結果を見る限り、わずか100分の4秒ほどの差に4台がしのぎを削っている。つまり、このタイム差だからこそQ1突破の可能性も大きい。チーム一丸の作業で、Q2進出を狙ってのセッションがスタートした。

午後2時50分。気温19度、路面温度26度の中でGT500のQ1がスタート。午前のセッション終盤よりも気温は3度、路面温度に至っては7度も低いコンディションだ。この状況によって、タイヤのピークを合せ込むのが極めて難しくなり、いつもより1周多いアタックラップにチャレンジする形となったが、Q1担当の山本尚貴選手は1分28秒533をマークして8番手でチェッカー。Q1突破を果たした。

Q2は伊沢拓也選手が担当。前回の岡山では出走チャンスがなかったため、今回がシーズン初アタックとなる。午後3時35分からのアタックでは、気温18度、路面温度24度とさらに下降。タイヤに十分な熱を伝えるためのアプローチが必要となる中、伊沢選手も最後の最後にうまくタイミングを合わせ、1分28秒736をマーク。結果、決勝は8番手からスタートを切ることになった。

Q1でアタックを担当した山本選手。「Q2進出のためにもドライバーとして最低の仕事はできたかなと思います。もちろん、自分の力だけではなく、チームが一生懸命がんばってくれた結果でもあります」とホッとした表情を見せた。しかしその一方で、「岡山での結果を考えると、今回は良かったということになるでしょうが、でも決してそういう雰囲気慣れてはいけなと思っています。

正直、まだレースを戦うという意味で、100%のパフォーマンスを引き出せていない。キチンと引き出すんだ、という意識の強さがもっと感じ取れるようにしていかなければならないと思っています」と気を引き締めていた。さらに、予選日の流れをこう振り返った。「朝のセッションでクルマを確認し、修正が必要だと思った箇所もありました。そのあたりはエンジニアふくめ、みんな一生懸命調整してくれたと思います。ただ予選のアタックでは気温、路面温度が下がってしまったこともあり、ウォームアップのタイミングが自分が思い描いていた理想とちょっと違いましたね。ウォームアップのタイミングがずれてしまいました。つまりタイヤの内圧もズレてしまいました。ホンネとしては、できればもうちょっと（上位を）、という欲はあります。でも、ギリギリ8位で滑り込めて良かったし、明日の500kmは厳しいながらも、なんとかチームとしてしっかり戦い、無事に戻ってきたい」と期待を寄せた。



また、Q2のアタックを担当した伊沢選手は、「アタックでは少し苦戦しました」と悔しさを見せた。「午前のセッション、Q1よりも気温、路面温度が下がってしまい、厳しかったですね。ただ、前回の岡山での色んなことを考えれば、今回はまず山本選手がよくQ1を通してくれたなという思いの方が大きいですね。だからこそ、僕自身がQ2でタイムそして順位を上げたかったという思いも強いです。その分、明日の決勝でしっかりと戦って、遅れを取り戻したいですね」と健闘を誓った。

◎ 決勝：

前夜遅くから雨となったサーキット周辺。夜明けを迎えてなお本格的な暴風雨となり、レースでのコンディションが懸念された。だが、午前7時前にはすっかり雨は止み、すっきりと澄み渡った青空がサーキット一面に広がって、残雪わずかな富士山も雄大な姿を現すこととなった。

フリー走行は午前8時30分にスタート。日差しが出る中、気温18度、路面温度は早くも24度にまで上がっており、コース上は見た目ほぼドライ。一部にウェットパッチが残る程度ということもあり、ウェット宣言は出ていたが、No.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTはすぐにスリックタイヤでセッションに取り組んだ。



今大会のレース距離は500km。通常より150km長い戦いとなり、レース中はルーティンのピットインが最低でも1回多くなる。都度ドライバー交代は必至で、給油やタイヤ交換などはその状況に合わせて各チームが戦略をもってコントロールする。フリー走行中はそのピット作業のシミュレーションをはじめ、決勝中のレースペースの確認など、細かな作業に時間をかけてセッションを終了。

No.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTは1分31秒250のタイムで8番手につけた。

快晴に恵まれた決勝日は、5万人を超える観客が来場。レース直前のグリッドも多くの人が詰めかけ、その熱気が冷めやらぬ中、いよいよ500kmレースの戦いが幕を開けた。富士スピードウェイの長いメインストレートには強い追い風が吹き、気温22度、路面温度はレースウィーク最高の40度まで上昇する中、No.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTは山本尚貴選手がスタートドライバーとしてクリアスタートを切った。

まずは予選順位の8番手でオープニングラップを終えたNo.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GT。大きな混乱もなく、序盤は順調に周回を重ねていく。早くも6周を終える頃には、GT300車両によるバックマーカーが出現。GT500同士のポジション争いだけでなく、GT300をタイミングよくかわす作業が加わるという、緊迫した時間が増えていく。だが山本選手は安定したタイムを刻み、ポジションアップの好機を狙いながら、走行を続けた。

500km、110周で競う中、その3分の1が近づく30周目、No.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTが100Rでスピン。その後、スピードを大きく落として走る姿がコース上の様子を伝えるモニターに映し出された。左リアタイヤにダメージを負っており、山本選手は大事を取ってクルマをコントロールしながらピットへと帰還。一旦、ガレージへと納められ、慌ただしく作業が始まった。スロー走行、そしてピットでの作業によって大きなロスタイムができたことで、残念ながらNo.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTは、周回遅れの状態でコースへと復帰。だが、山本選手から代わった伊沢選手は、気持ちを切り替えて再び戦線に向って行った。

しかし、68周目を走行中だったNo.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTにまさかの悪夢が訪れる。100Rでタイヤが突然バースト、この勢いでクルマのボディパーツが激しく破損する。伊沢選手はスピードに乗ったまま、なんとかクルマをコントロール、セーフティゾーンぎりぎりのところでクルマを停止させた。むき出しに近い状態のクルマから自身でクルマを離れたことから、伊沢選手に幸い大きな怪我はないことがわかったが、無残な姿となったNo.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTは、その場で戦いを終えるしかなかった。レースはこれを機にセーフティカーが導入され、また今季から新たに採用された規則によって波乱の展開を生む戦いとなったが、No.100 RAYBRIG NSX CONCEPT-GTにとっては、なんとも悔しさあふれる一戦だったのは言うまでもない。

なお、レースウィーク中に先の熊本地震の影響を受け、第3戦オートポリスの中止が正式に発表された。ただし、年8戦開催の予定を検討しており、今後新たな開催案が発表されると言われている。

◎高橋国光総監督

大きなアクシデントながら、伊沢選手には怪我もなく、幸いでした。原因をこれから究明していくことにはなりますが、やはり今後レースを戦って行く上でも、このことをひとつの糧としてキチンと対応していく必要があると思います。レースに関わる者はみな、それぞれの仕事で懸命に作業をしているわけですが、しかし、危険と紙一重の中で戦っている以上、やはりあってはいけないことだとも思います。レースウィークを通して、8万人ものお客様がレースを楽しむためにサーキットに足を運んでくれているわけです。そこでそのようなことがあったのは、非常に残念でもありました。色々な意味でレベルアップを求めていく必要があるでしょう。開幕戦の岡山そして今回の富士と、我々チームにとっては大変つらい状況が続きました。これからのレースでは、まずキチンと戦えるよう、しっかりと準備していかなければなりませんね。



◎山本尚貴選手



正直、クルマには満足できるトップスピードはなく、岡山同様に厳しい戦いでした。その一方で、選んだタイヤとクルマのマッチングはよく、決勝でのペースは決して悪いものではありませんでした。前のクルマをブッシュしていた矢先のバーストだったので、悔しいですね。レースは道具を使って戦うものなので、こういうトラブルは付きものだとも思いますが、なぜこのようなことが起こったのかをまずはキチンと解明してほしい。そして今後のレースに向けてみんなでまたしっかりとできることから準備をしていきたいと思えます。

◎伊沢拓也選手

予選から自分たちのできる中で、岡山よりは良くなっていたし、ペースを見ても岡山よりはしっかりと戦えているという感触はありました。一方で、まだトップには届いていないのも正直なところですね。次のSUGO戦まで時間はあるし、その間に合同テストも2回あるので、これを活用しないと。ほんとにだいたいやりこんだ上で、初めて上位と勝負ができると思っているので、菅生でチャンスがくるよう、しっかりチームで整えていきたいと思えます。今日はまず山本選手のときにタイヤトラブルが出て、この時点で一旦戦列を離れてしまうことになりました。さらに僕もまたこういうタイヤバーストという結果になったんですが、ペースを上げた中でトラブルが出たのは非常に残念です。でも乗ってる感触を含めて結構いい感じではあったので、そこは今後に向けて良かったところをもっと伸ばしていけるようにしていきたいですね。



次戦は7月23～24日に宮城県・スポーツランドSUGOにて

開催されます。引き続き、皆様のご支援・ご声援をお願いいたします。